

## 山脇直司のグローカル公共哲学における政治的主観性の問題

Lyon Institute of East Asian Studies (IAO)

IRPHIL - Institut de recherches philosophiques de Lyon (EA4187)

Phd student in philosophy at the university of Jean-Moulin Lyon 3

Samuel Marie

本発表において山脇直司のグローカル公共哲学における政治的主観性の問題について話したいと思います。山脇直司は丸山眞男の継承者として知られている。確かに、日本で丸山眞男は現代思想の研究者としてよく知られていた。日本社会の現代化の本書を出版していた。それだけでなく、フランスの有名な知人ジャンポール・サルトルと同じ様に丸山眞男は平和主義や人間の権利についての公約においてよく知られていた<sup>1</sup>。山脇直司の哲学における一番大切な課題は現代社会の考え方だと言われている。その点で、丸山眞男の思想と密接な関係があると言えるだろう。実際に、20世紀に入り、現代日本社会の民主化の経験の影響を受けて、日本人は市民として自己自身を見るようになった。従って、日常生活文化は多種多様な変遷を得た。当時の伝統的社会から、近代市民への考え方の変化という丸山眞男の研究テーマを中心にする。つまり、政治哲学者として丸山眞男は日本で現代思想の影響についてよく研究した。さらに、彼は主体性の概念と政治制度の関係も関心を持っていた<sup>2</sup>。山脇直司の研究分野はほとんど同じ分野なので、丸山眞男の継承者として知られている。しかし、山脇直司と丸山眞男の考えは似ているようなものと言っても、いつも同じ観点から問題を取り組んでいるわけではない。

実際に、日本においてグローカル哲学という表現を作った思想家として山脇直司が知られている。山脇直司の一番大事の選考著者の中でドイツの哲学者ユルゲン・ハーバーマスとかドイツから来たアメリカ人政治思想家ハンナ・アーレントが挙げられる。上述した著者の主な課題をより詳細に見よう。その課題は「現代社会において公共性の意味とは何か」や「個人の権利の問題」あるいは「グローバル化時代において正義とは何か」などという主題について山脇直司が考えているかである。本発表において、山脇直司の政治思想を検討したいと思う。

そのため、まず公共哲学の概念の起源をを明らかにする。次に、その知的流行からどのような主体性の考え方が出来たのかを説明する。最後に、山脇直司のグローカル哲学における自己の概念の再考について話したいと思う。

---

1 Rikki Kersten, *Democracy in Postwar Japan: Maruyama Masao and the Search for Autonomy*, Nissan Institute/Routledge Japanese Studies, 2012

2 Uno Shigeki. La Modernisation politique au Japon et l'idée de subjectivité chez Maruyama Masao. In: *Ebisu*, N. 32, 2004. pp.67-83.

## I) 公共哲学とは何か

西洋の学問体制において公共哲学という分野の中でその課題が研究されている。現在、公共哲学と言え、二人の有名なアメリカ人哲学者の名前が挙げられる。その哲学者はジョン・ロールズとマイケル・サンデルである。1955年に「The public philosophy」というリップマンの著作が出版されてから公共哲学という表現が初めて用いられた。ところが、1971年にジョン・ロールズの「正義論」<sup>3</sup>が出版された後、アメリカの大学の中で本当の公共哲学の知的伝統が現われるようになったといわれている。英語の「public philosophy」という言葉から日本語の「公共哲学」という言葉が作られた。ところで、「public philosophy」の「public」というのは「共同体の問題に関して哲学を通じて考えること」と意味する。その定義によると、当時のアメリカ人哲学者サンデルは「Public philosophy」のハーバード講義として「正論の意味について一緒に考えて見よう」という議論のテーマをやっている。サンデルの政治哲学についての講座はインターネットで、世界中に放送されている。その点で、サンデルの講座の「public philosophy」は実際に公共的のものになっているだと言えらる。しかし、はじめて公共問題と政治哲学の密接な関係考えたのが、哲学者ジョン・ロールズであった。1971年に、ジョン・ロールズは現在の政治の問題を考えるために、政治哲学の論理を考え出す必要があると述べた。欧米で公共哲学の実践は正義の競争の中で形成された。確かに「正義論」の一番重要な課題は「社会の基本的な正義の原理を決めなければならない場合はどのようにするのか？」という問題である。つまり、ジョン・ロールズは誰でも認められる基本的な正義の原理を考えたということである。そうした原理の要因が二つ挙げられる。第一点は、原理は政治的自由や言論の自由あるいは身体的自由などを含む基本的諸自由を全員に平等に配分することである。第二点は、その原理は二つの部分に分けられる。

1) まず、社会的または経済的な不平等を機会の均等を図りながら、最も不遇な人々の利益を最大化することだ。

2) 結果的に発生した社会的・経済的不平等に対しては、最悪の状況は可能な限り改善することだ。

ロールズの「正義論」の中では、民主制と主体性との間に特別な関係が提示されている。確かに、自由主義の定説における著者は民主的な公共空間と主観性の概念が密接な関係を作ることが必要だと思っている。その思想の中で自由な行為ができる人間が含む政体

---

3 John Rawls, *A Theory of Justice*, Cambridge, Massachusetts: Belknap Press of Harvard University Press, 1971

を作る。ロールズは自由的思想家として各人間は基本的に同じ価値を持つと思っている。皆は人間として平等なので同じ基本的諸権利を持つ。つまり、哲学の定説としてロールズの自由主義は全称命題だと理解されている。市民社会と平等に自由的な個性が現われることは現代化の影響である。しかし、そういう人間の本性の理論はよく批判されている。20世紀に、政治哲学の分野において自由主義と共同体主義の論争が行われて、共同体主義の支持者はジョン・ロールズの自由主義に対してさまざまな批判をしていた。批判者は全称命題としての自由主義の人間本性という考え方は意味がないと厳しく判断する。人々は社会の部分に過ぎないものとして存在していると批判者は述べている。

## II) グローカル公共哲学における主観性の概念の再考

山脇直司は上述した批判者の継承者として見られ、現代主観性の概念を再考したのである。実際に、山脇直司の思想の中で、全称命題と関係があると言っても、彼が近代哲学の概念の主観性を支えるわけではない。従って、自由主義の人間性についての考えを同じく批判するようになった。それについて、二点が挙げられる。第一点目は、デカルトの思想から人間の本質が無形的物質として考えられていることである。近代哲学では、人間性は常識の観点と対立して、肉体的物質として考えられていない。つまり、全称命題によって、どこでも、いつでも、人々が考えることができる物質として存在しているので、人間性の特徴はその同じものであると言える。しかし、20世紀に入ると、一般的な人間性の特徴が見つけられるということに厳しい懐疑論が現われるようになった。実際に、人間の本質を研究する場合は、個人は歴史的共同体の部分に過ぎないものとして人間性のことが分かっている。換言すれば共同体主義の支持者の批判によって近代主観性は社会との関係がないと人を考えることが間違える。その思潮における人間はモナドではないという批判が発展された<sup>4</sup>。(モナドの概念を作った哲学者はドイツの思想家ゴットフリート・ライプニッツである。個人は無形的物質だという考えである。ライプニッツの思想における個人は自律した個人として存在している、外界との関係がない。モナドは自然における真の原子(不可分なるもの)である。つまり、ライプニッツの形而上学の基本的原理によって現在に存在しているものはモナドとして立ち現れる。) 実は、個人主義に対する批判によると、自己の特徴は歴史的に決定されるものなので自律した個人の理想は哲学的なフィクションとして理解された。その批判の結果は自由意志が存在することがないというのである。つまり、主観の現代哲学に対して個人の意志は選べない偶然の産物であるという意味だ。

二番目の批判によると、近代主観性の論理における人間の基本的な特徴は理性的思考ができるということだとしたら、本当の人間性の特徴が分からないということになる。だから、人間性の理論を作った時に考えている論理における情感を含むことも必要になる。その哲

4 Whilehm G. Leibniz, *La monadologie*, Paris, Gallimard

学的定説によると、西洋の哲学の伝統におけるアリストテレスから「人間は合理的動物である」という定義がよく広がっていた。山脇はそういう「人間」の定義に反対している。しかし、人間像についてのアリストテレスの考えは完全に間違っているわけではないとも言えよう。

山脇直司の自己の思想にとって人間はすべて特別な社会の部分と世界市民として存在している。その二元論との関係でグローバルの概念が発展されている。

実際に、山脇直司は現代主観性の定説の批判をしていると言っても、非合理的思考を支えるわけではない。山脇直司の思考におけるグローバルのコンセプトの含意は、人間は普遍性という観点から考えられると言っても、いつでも歴史的に決定される場所で存在しているということだを忘れないほうがいい。山脇直司によれば、

「グローバルという言葉は、一般的になりつつありますが、この概念が非常に便利なのはそれによって、グローバリズムとローカリズムの二項対立を越えるような視点が確保できるからです<sup>5</sup>。」

つまり、山脇直司の思想においてユニバーサルと特殊の関係の問題を扱われると言っても、何とか、この問題は政治哲学の言語において公私二元論として翻訳されていたのだと言える。人間が孤立した個人として考えられると、人間の姿が関連性の必要さという観点から見られないだろう。その点で、「他者と公共世界との関連性において自己を理解する人間」が山脇の思想テーマの中心とする。そのテーマについて、さまざまな知的遺産を受けた。

20世紀に、人間科学と現象学の進歩によって人間は特別な歴史的プロセスの産物として現われる。一番大切な影響は現代社会学だ。現代社会学によって、個人化について社会学の理論が分かると、人々は社会化のプロセスに過ぎないものとして個人は適当に構成されるはずだ。

「人間は、他者とのコミュニケーションなくして、また世界を理解することなくして、有意義な生活を送ることができない。人間の世界理解は生まれたとき以来、親子関係に見られるような親密圏から、徐々に種々の制度や組織が絡んだ公共世界へと広がる<sup>6</sup>。」

時代を超越した人間性がないことを意味する。個人は「成る」の産物に過ぎないものとして存在しているので暮らしている文脈を研究するのが必要になるという。その点で、ドイツの現象学の影響が現われる。現象学における主体の再考の影響を受けて、人間と歴史性との関係を発展していた。特に、ハイデガーの現象学において人間の存在の構造を研究するために歴史性のコンセプトが基本的なカテゴリーとして提示された。ハイデガーの哲学でもデカルトの主体性のコンセプトに対抗していた。人間は現存在(Da-sein)とをして世界の中で活動する具象的存在なのだという事をハイデッガーは強調した。換言すれば、上

---

5 山脇直司、『公共哲学とは何か』特集／持続可能な福祉社会に向けた公共研究拠点、基調報告2, p-40

6 山脇直司、『グローバル公共哲学「活私開公」のヴィジョンのために』,東京,東京大学出版会,(2008), p-4

述した思考の共通点は人間の本質は歴史における立ち現れであるということ述べた。つまり、山脇直司は一般的の観点から考えられる能力が人々の間に平等に配られることを認めると言っても、彼の思想における主体性がいつも根本的に位置付けられるものとして考えられている。実際に、上述したこの二つの次元を結ぶことは山脇直司にとって、公共哲学の基本的な目的だと言えると思う。この問題が形而上学から政治論へ移された。山脇直司によれば、現代政治哲学における自由かつ平等な市民が政治共同体の問題についての議論ができる場所において公共空間を作ることの可能性がよく考えられている。(ヘーゲルの言語において近代国家が現れて以来、人々は市民になるときに過ぎないとして個人的な命からユニバーサル観点へ向けるだと言える 近代民主国家が個人とユニバーサルな観点の間に調停として解釈されてもいいのだと思う。つまり、山脇直司はグローバル公共哲学はこの政治哲学の伝統を受け継ぐと言えるだろう。

#### 結論：

さて、結論に入りたいと思う。この山脇直司の書物がさまざまな知的交流の産物として作られた。この書物の中で山脇が作ったグローバル哲学の思考における自己や他者や公共世界の関係についてよく論じられている。山脇直司の研究はこの三つの概念の間に密接な関係が現れるという結果を明らかにした。確かに、現象学と社会学の教えは主体性は社会化の産物に過ぎないものだという教訓である。しかし、山脇直司は現代主体性のコンセプトを否定するわけではない。グローバル公共哲学によって、人間は特別な共同体に暮らしても理性を使ったらユニバーサル観点から考えることができるようになる。公共哲学においてこの次元を考えることが必要だということだ。山脇直司は政治哲学の分野においてこの問題の解決をした。

#### 参考文献

Barshay Andrew, *The Social Sciences in Modern Japan. The Marxian and Modernist traditions*, Berkeley, University of California Press, 2004

Rawls John, *A Theory of Justice*, Cambridge, Massachusetts: Belknap Press of Harvard University Press, 1971

Rikki Kersten, *Democracy in Postwar Japan: Maruyama Masao and the Search for Autonomy*, Nissan Institute/Routledge Japanese Studies, 2012

Uno Shigeki. La Modernisation politique au Japon et l'idée de subjectivité chez Maruyama Masao. In: Ebisu, N. 32, 2004. pp.67-83

山脇直司, 『グローバル公共哲学「活私開公」のヴィジョンのために』, 東京, 東京大学会(2008)

山脇直司, 『公共哲学とは何か』特集／持続可能な福祉社会に向けた公共研究拠点, 基調報告2